

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり。弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえられず、ただ信心を要とすとしるべし。

そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきがゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々

南第3組 光福寺住職

金石 晃陽

text by Kouyou Kanaishii

第一章「ただ信心を要とす」

今、私の前に、宮城顛先生からの一枚の年賀状がある。

衆生という言葉は「この世には、赤の他人というものはいない」という自覚の言葉であったと、あらためて思い知りました。その自覚からしか、平和も平等も成り立たないのだと思います。

この2004年の年賀状の翌年、宮城先生は病床の身となられた。本願を聞し続けられた先生の晩年の、いや御一生の課題でもあつたのであろうか。

この第一条は、本願における、十方の一切衆生の平等の救い（弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず）が語られてある。これこそ、「この世には、赤の他人というものはいない」という、一切の衆生を撰して自己とせんとする菩薩法蔵の透徹した眼であり、そこに大悲の心があろう。

しかし、現実の私は、真に平等の救いを求めているのだろうか。逆に、どこまでも私一人のみの救いしか求めていないことが知らされる。自我（自他差別心）でしかない私は、私の血縁・地縁・好み・損得・価値観・利用関係でしか他を見ることができない。そして、私以外の存在を「自我のものさし」によつ

て、「えらび、きらい、みすてて」いき、限りない孤立感と閉塞感の中へ私を閉じ速めてしまう。その結果、私以外の存在はすべて「赤の他人」になっていく。その私を、仏は「**罪悪深重煩惱熾盛の衆生**」（自分の力では救われざるもの・開かれないもの）と言い当てて（機の深信）、しかも、その私を必ず救おうと誓われたのが弥陀の本願であった（法の深信）ことへの目覚めと驚きと領きと感動を「**ただ信心を要とすとしるべし**」と語られるのであろう。

仏道の課題を端的に言えば、「この身、今生において度す」（三帰依文）という一点にある。「自己とは何か」「他者とは何か」「救われるとはどういうことか」という具体的な問いが結実したものである。

「この身」とは、善導が「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より以来、常に没し常に流転して出離の縁あることなしと信ず」と告白されたが、それは、単なる一個人という意味ではない。この身は、どこまでも関係存在、歴史的社会的存在である限り、（共に）ということをして離れて個人のみを救いはありえない。たとえ、自利利他成就の教え（大乘）に学んでいたとしても、もし、個人の救い（自利のみ）を課題にするなら、それは、二乗地（声聞・縁覚）に墮ちている以外にない。しかしこれは、私の方から、迷いを超えて無上涅槃に至ろうとする限り、避けて通れないこの身の現実である。

念仏往生の道は、無上涅槃界（一如法性）より、この「罪悪深重煩惱熾盛の衆生」、つまり「出離の縁あることなき身」に開かれてきた唯一の仏道であり、念仏一つをもって、一切の衆生を共に無上涅槃に至らしめようとする、これが、弥陀の本願である。

だからこそ、この本願の仏道において、念仏以外の人間の善根など全く無要（他の善も要にあらず）であり、どのような悪も往生の障碍（悪をもおそるべからず）となるはずもないのである。（仏は、えらばず、きらわず、みすてず。この私まで）
ない。